

平成 27 年度「インクルーシブ教育システム構築モデル事業(学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進)」
成果報告書

団体名	横浜国立大学
-----	--------

I 概要

1 事業の概要

特別支援学校と近隣の小・中学校と協働し、多様性を認め合う共生社会の構築に必要な心のバリアフリーを推進するための実践の方法論を明らかにすることを目的とした。すべての人々の持つ多様性に気づき、互いが認め合う素材として、障害者スポーツ教室を設定した。オリンピック、パラリンピックの日本代表選手を招き、本校の知的障害のある児童生徒と一般の児童生徒を対象にバレーボール、ブラインドサッカー、ウィルチェアーラグビーの各教室を開催した。バレーボール教室は中学校の体育館で約 3 時間、ブラインドサッカーとウィルチェアーラグビーは本校体育館で約 1 時間実施した。実践の成果は、各教室の取組に関する行動観察と、参加者への聞き取り調査から評価した。

その結果、各教室に参加した横浜国立大学教育人間科学部附属特別支援学校（以下、附属特別支援学校）の児童生徒、小・中学校の児童生徒、そして付き添った教員や保護者のほぼ全てから、活動に対する高い満足度と取り組みやすさの評価が得られた。加えて、共生社会を構築していくことの大切さとともに、障害者スポーツ教室がその推進の手法となるとの評価を得た。以上から、心のバリアフリーを推進していく手法として本実践の有効性が示唆された。

2 事業の成果

本事業における以下の 5 点の工夫や配慮が、心のバリアフリーを推進するために効果的であったと考えられた。

(1) 交流及び共同学習機会の設定

附属特別支援学校の生徒と隣接する附属中学校、及び近隣の小・中学校の児童生徒を対象に障害者スポーツ教室を設定した。ウィルチェアーラグビーに参加したある中学生は、「私は実際に車いすに乗ってウィルチェアーラグビーゲームを体験しました。ウィルチェアーラグビーというスポーツを、今回初めて知りました。スポーツ用車いすの操作に慣れてくると楽しかったり、パラリンピック選手や特別支援学校の生徒と一つのボールをパスし合ったりすることでウィルチェアーラグビーの素晴らしさと同時に、様々な人達とつながることができたということの楽しさや嬉しさを感じることができました。今回のウィルチェアーラグビー教室を機に、そのスポーツ自体に興味をもったし、とても貴重な体験になりました」と述べていた。また、スポーツそのものを交流及び共同学習の素材として設定したことについて、参加したボランティア学生から「スポーツを通して自然と特別支援学校と中学校の生徒が協力したり、達成を喜んだりする姿がみられました。とても貴重な時間であったと思います」と述べていた。特別支援学校と小・中学生が障害者スポーツを通して交流及び共同学習の機会をもったことは大変効果的であった。

(2) 活動種目と指導者の存在

交流及び共同学習の活動としてバレーボール、ブラインドサッカー、ウィルチェアーラグビーの3種目を設定した。各教室の実施期間が、いずれも2016年オリンピック・パラリンピック予選の期間と重なっていたため、連日、代表選手の活躍がテレビ等で報道されていた時期に取り組むことができた。

活動種目について、附属特別支援学校の生徒は「経験のないブラインドサッカーはとても楽しかったです。仲間と協力ができて良かったです」、中学生は「バレーボールという共通感から、それを通して交流できるのは楽しくコミュニケーションが取りやすいから、とても良いと感じた」「ウィルチェアーラグビーをはじめて知ったので、試合の時の迫力がすごかったです。障害のある人でもパラリンピックに出場しているのがとても感動しました。私は何にでも工夫してがんばろうと思います」と述べていた。

また、活動の指導者として、元日本女子バレー代表監督と選手、現日本ブラインドサッカー代表選手、現日本ウィルチェアーラグビー代表選手を招いた。附属特別支援学校の生徒は、「オリンピックでメダルを獲った経験がある二人の先生方にバレーボールの技術を教わり、とてもいい経験になりました。練習試合の中でも先生方のプレーを見てとても勉強になった部分が多くとても楽しかったです」、中学生からは「今日初めてウィルチェアーラグビーを知り選手の試合を見たり、実際に話を聞いたりすることでとても興味をもった。障害者だなんて思えないぐらい選手の人達がイキイキしていて、『障害を持っていても努力すればある程度の事ならできるようになる』と言っていて、それにびっくりした。私は、障害は持っていないのにもかかわらず、『これは苦手だから』と避けてきたものや逃げてきたものが多いから、これからは苦手な事にもどんどん挑戦していったり、やっていくうちに好きになったり得意になれるように今まで以上に『努力』をしていきたい」と述べていた。中学校の引率教員は「一流の選手に来てもらえるとうわりやすく教えて頂けるのでとても有意義でした」と述べていた。今回、交流及び共同学習の活動として3種目の障害者スポーツを設定したこと、また、それらの指導においてオリンピック・パラリンピック代表選手を招いたことも大変有効であった。

(3) 参加者の設定

バレーボール教室は、附属特別支援学校の中学部、高等部の生徒と卒業生、小・中学生が参加した。ブラインドサッカー及びウィルチェアーラグビー教室は、附属特別支援学校の中学部、高等部の生徒と中学生が参加した。3種目について、ほぼ全ての参加者から高い評価を得た。また、自由記述には、本事業のねらいである「心のバリアフリー」「共生社会づくり」に関する積極的な記述が多くみられた。中学部、高等部段階の知的障害のある生徒と中学生を中心に設定したことは、事業目的の達成に効果的であった。

(4) 実施手続き

各教室を実施するにあたって、参加する児童生徒がお互いにふれあったり、共に活動したりする場面をできるだけ多く設定するようにした。バレーボール教室では、元オリンピック代表監督の指導のもと、すべての参加者が全体で準備体操、ウォーミング・アップ、サーブ、レシーブ等の基礎練習を行い、その後、附属特別支援学校の在校生、卒業生、小学生、中学生の各チームに分かれて対抗戦を行った。その際、附属特別支援学校の生徒と小学生、中学生がそれぞれ対戦できるようにした。また、知的障害のある生徒、小学生、中学生、そして元オリンピック代表選手が含まれた混成チームを編成して対抗戦を行った。使用するボール等を相談したり、審判をしたり、応援グッズを活用しながら参加者全員で一緒に応援したりするなど、参加した児童生徒が主体的に活動を運営するように配慮した。

ブラインドサッカー教室は、附属特別支援学校の生徒と中学校の生徒の混合チームを作り、パス、ドリブル、シュートの基礎練習を附属特別支援学校と中学校の生徒がペアで声をかけあいながら取り組むようにした。最後に、ブラインドサッカーの指導者を囲んで、附属特別支援学校の生徒と中学校の生徒と一緒に質問する機会を設定した。また、ウィルチェアーラグビー教室では、附属特別支援学校と中学校の生徒から数名を選びウィルチェアーラグビーを体験するとともに、選手を交えた混成チームを作り、ミニゲームを行った。それ以外の生徒はミニゲームを参観し、応援するようにした。体験終了後、附属特別支援学校と中学校の生徒が混合したグループに分かれ、グループ毎に代表選手への質問コーナーを設定した。

ブラインドサッカーを体験した附属特別支援学校の生徒は、「中学生の人と一緒にブラインドサッカーをやって楽しかったです。おかげで仲良しになった子がいます」「アイマスクをつけてやると何も見えなくどこにボールがあるかわからなかったけど、ペアの人の声を聞いて『ここにボールがあるんだな』と思ったり、教えるときは『右だよ』と言えたりしました。コミュニケーションが大事なんだなと思いました。良い体験ができてよかったです」と述べていた。一方、中学生からは「正直難しかったけれども最後には楽しいというのが印象に残りました。目が見えない中だったので手をつないでいた支援校の子にも教えてもらいながらやることで協力して楽しむことができました。本来の楽しさ、協力する楽しさの両方を体感することができたのでとてもいい体験をすることができました。今回、不自由の方の気持ちを知ることができたので、これからの生活ではそのような方の事も考えながら生活していきたいです」と述べていた。設定した種目に加えて、できるだけ協力したり、声をかけあったりする機会を多く設定したことは大変有効であった。

(5) 教職員の協力関係の構築

バレーボール教室は附属特別支援学校の体育館がバレーボールコート2面を設定できないため、隣接する附属中学校の体育館を利用した。本事業を進めるために中学校の教員に説明会を行ったが、実際にバレーボール会場の設営にあたって中学校の教職員と生徒、それに附属特別支援学校の教職員が協力して実施した。会場設営の準備や片付けの作業等を通して、教職員の関係が密接になった。その後、継続してブラインドサッカー教室、ウィルチェアーラグビー教室を実施する中で、中学校の教職員と附属特別支援学校の教職員の親和性が高まっていた。教職員が具体的な協力を通して関わりを深めていくことは、本事業の推進に大きな役割を果たしたと考えられた。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

バレーボール教室に参加した附属特別支援学校の生徒は、「もっとゲームをたくさんできたらいいなと思っています」、「試合数が少なかったのもう少し増やしてほしいです」、ブラインドサッカー教室に参加した中学生は「もう少し長い時間で、試合ができればよりいいと思います」としていた。一方、ウィルチェアーラグビーに参加した附属特別支援学校の生徒は「ゲームを見ているだけでなく教室に参加した全員が参加できればよいと思った」と述べ、中学生は「代表者だけがゲームをして残りが観戦という面がつまらなかった」「時間や車いすの数の都合があるので仕方ないのですが、代表生徒しか体験できなかったのはすごく残念でした。体験できた生徒とできなかった生徒では感じるものが大きく変わっていくと思います。なので、体験できる生徒をもっと増やしていけば今回よりも更に良いものになるのではないかと思います」という意見や要望があった。

今回の取組に関してほぼすべての参加者から高い評価を得た。しかし、ウィルチェアーラグビー教室では、参加人数、時間、機材の関係で一部の生徒しか体験できなかった。今後、ウィルチェアーラグビーを中心に参加人数、実施機会（回数）、実施時間、機材を工夫することによって、さらに心のバリアフリーが推進されると考察された。